

**特集 1** 小中学生の難しい時期を乗り切るために

# C・D級の 壁を 破れ！

小学生高学年から中学生は、精神的にも身体的にも不安定になる年代。この時期は先を見据えて、焦らず、かつ有意義に乗り切りたいものです。本特集ではピティナ・ピアノコンペティションC・D級を切り口として、この年代の生徒に共通する「壁」を取り上げてみました。ご参考になれば幸いです。



課題曲選定委員長に聞く!

# C・D級、なぜ壁を感じるのか?

## 「積み重ね」の差が出る級



江崎 光世 先生

運営委員 指導法研究委員 (初級グループ) コンクール事業担当者連絡会委員 課題曲選定委員長 新曲課題曲選定委員

— ピティナ・ピアノコンペティションの過去10年間の参加者推移(表1)を見ますと、B級からC級は順調に進級しているようですが、C級からD級との間にはまだ壁があるような気がいたします。この度コンペ指導者の先生方を対象としたアンケート※でも、4割の方が「C級⇒D級」の進級が最も難しく、その主な理由として「勉強や部活で忙しくなる」「課題曲が難しくなる」と回答されました。C級もこの10年で参加者数こそ増えていますが、やはり壁を感じている指導者が多いようです。小中学生を生徒に持つ先生方は、どのように生徒と向き合えばよいでしょうか。

課題曲は各世代の中庸レベルで設定。「何が求められているか」把握を

ピティナ・ピアノコンペティション(以下コンペ)の課題曲は身体的・精神的成長を考慮して、その年代の中庸・平均的なレベルを想定して設定してあります。これは10年来特に変化はありません。ですが、近年C級のレベルが上がっているの、それに伴い課題曲も部分的には少し水準が高くなっているかも知れません。10年くらい前まではC級が一つの壁であったようですが。統計をみましても、のべ約6,000名ということで、以前に比べて参加者の比率が高くなっています。またF級の比率も増えました。これは基礎力と指導力が上がり、ピティナの蒔いた種が育っている証でもありますね。

— 各級の課題曲には、どのような要素が求められているのでしょうか。

B級までは譜面を正確に再現し、適切な指導

10年前と比較!

### 10年間でC級大きく増加、D級の壁はまだ厚い?

級	2003年度	10年前比較(%)
A2級	2069名	157%
A1級	5913名	141%
B級	7981名	151%
C級	5901名	164%
D級	2882名	134%
E級	1288名	118%
F級	1089名	174%

※左表の伸び率(%)をグラフ表示

表1:2003年度級別参加者数と10年前比較(人数は延べ)

10年前と比較すると、C級・F級の伸びが顕著である。一方でD級・E級は全体の増加率に比べるとやや伸び悩んでいる。先日、会員を対象に行ったアンケート(過去コンペに延べ50名以上輩出した指導者対象)でも、「C級⇒D級での進級が一番難しいと感じる」と回答した先生が約4割、そして「B級⇒C級」「D級⇒E級」と続いた。やはりD級は一つの壁なのだろうか。



がなされれば、ある程度聴ける演奏が可能ですが、D級くらいになると大人の曲のレベルになり、演奏に対する本人の意欲、基本的なテクニック、譜面を深く読み込む力が要求されます。

例えばシンフォニアがでてきますが、2声インベンションに比べると負荷が倍以上になるので、早くから意識してレッスンに取り入れることが必要です。

古典では構成、特にソナタ形式への理解が求められます。標題のない曲にどれだけ音楽を入れ込めるかが課題です。ロマン派は表現力の幅の広さ、自分の呼吸で歌うことが大切。そして近現代曲は、近現代にしかない音やリズムを感じる事がまず第一歩です。ドビュッシー、ラヴェル、カバレフスキー、プロコフィエフ、バルトーク等の曲に親しむとよいでしょう。

## C級・D級は基礎力の差が出る時期

— C・D級は大人の音楽への入り口でもありますので、ここに難しさを感じている指導者の方も多いようです。C・D級を特徴づけるとすれば？

C・D級は、B級までに培った基礎力(総合能力・

ソルフェージュ等)が試されるところです。その生徒自身の学習の定着度に加えて、それまでの教育の成果が、生徒を通して表れる時代です。残念ながら、曲の難易度と成長の度合いがミスマッチなケースが一番顕著に見受けられます。

私の教室ではA2・A1級をじっくり時間をかけて、決して背伸びさせないように取り組んでいます。そうするとB級までは時間がかかりますが、その後飛び級ができるようになります。

同級の2年目はレパートリー拡大、またアンサンブル力アップを目指して、デュオを併願させます。すると6曲のレパートリーができます。そしてさらに違うコンクールを併用して、一気に8~9曲勉強できるわけです。長い期間かけて計画的にレパートリー作りができるよう、意識しています。もし多くの曲数ができない場合は、指回りが遅い、読譜が遅い等、その問題点を早期に発見して解決するように導きます。

— 今年はB級とデュオ初級の併願者が、昨年の1.4倍ほどいました。早い段階からデュオの積極的な取り組みが見られますね(表3)。

10年前と比較!

## 2年連続同じ級受験で、着実な進歩に期待

表2: 2年連続で同じ級を受けた参加者

	1993年度		2003年度	
	人数	割合[%]	人数	割合[%]
A2	4名	43	115名	9
A1	411名	16	714名	19
B	692名	22	1202名	29
C	405名	19	891名	25
D	269名	22	396名	24
E	81名	14	139名	20
F	58名	18	102名	19

### 2年連続で受けた理由とその結果は?

- ・1年間の失敗や講評に書かれたことを参考にし受けてさせる。予選通過、全国へ通過した場合も二度受けさせることがある。講評を参考にすることが一番です。(真壁尊子)
- ・「今度こそは!」と意気込む子供と、マイペースの子供、個性に応じて対応しています。(上野敬子)
- ・2回目の方が、落ち着いて自信をもって臨める様です。1回目で良い成績を取っていても、よく話し合っただけが良いと判断した時だけ同級を受けさせます。(穂積有紀)
- ・2年目は、気持ちにゆとりが出ます。逆に余裕があり過ぎて失敗することも、又よい経験となります。(中村真代子)
- ・2年目は音楽的な目標が達成出来るように考えています。(宮村トヨ子)
- ・力量や手の状態に合わせて課題曲を選択してるが、2年目は苦手なタイプの曲を取り入れたり、練習期間を半分程度にしてみる等、緊張感を失わないように工夫している。(奥村真)
- ・とにかく1年間の力のつきかたはコンペを受けている子はハッキリ上達が見えます。(田中みゆき)
- ・学年があがることで、前年より余裕をもって弾けると思う。それぞれの生徒が「自分らしい演奏」ができた方がいいと思う。御父兄の中には「前回より良い成績を」と考えてる方がいるので、結果にこだわり過ぎぬようお話ししている。(西尾学)

※記事( )内の指導者名は全て敬称略。



## D級はピアノ人生における最初の分岐点

C級からD級というのはピアノ人生における過渡期です。中学校への進学、部活動の開始などによって、ピアノの練習時間が取れなくなってきました。練習時間を作るということは、ピアノに対する愛着や目的意識があるからできることで、ここが一つの分岐点になるでしょう。つまりピアノを積極的に勉強する子と、別の活動に興味を持つ子とに分かれます。部活動等も視野を広げるためには大切なので、歓迎です。全ての子がピアノだけに集中できるわけではありませんので、プラスバンドや合唱等、音楽に触れるジャンルを増やしていくのも、選択肢の一つですね。いちどピアノを中断しても、また部活動などで練習時間が取れなくても、レパートリーを作る時間はなくなりますが、根底にある力は変わりません。ピアノ以外の活動に向いているなどという場合は、先生もそれを見極めて後押ししてあげることも大切ですね。

中でもD級というのは、肉体的・心理的に最も不安定な時期です。成長期にあって肉体はどんどん変化し、その変化に精神がついていかず、心理的に不安定に陥りやすいのです。中学校受験を経験した子は、受験の反動もあるでしょう。まさにここが人生における進路決定の第一

段階という時機ですね。

## 子供は「未来の人」

C・D級を受ける子たちは、ピアノを始めて大体5年以上は経っているはずです。ここで一度自分とピアノの接し方を見直し、本当にピアノがその子に合っているのか、ピアノの為に時間が割けるのか、そこに目標・目的があるか、を見極めることが大切だと思います。

コンペに限らずステップも同様ですが、参加する意味をきちんと理解し、また参加後はどのようにその結果を好転させていくか、が重要です。指導者は保護者にその点をよく理解して頂けるようにしたいものです。コンペが始まってまもない80年代前半は偏差値教育全盛時代で、各地で親御さんの競争心が露呈していました。親は「この子にはこうあってほしい」とつい押し付けがちですが、世の中の変化や時代の流れはもっと早いのです。10～20年後社会がどのように変化し、そこで子供の能力がどの程度通用するかは、私達の想像の及ばぬところですね。

子供は「未来の人」。ですから、特に小学校時代は、趣味・専門にこだわらず、基礎教育をしっかり定着させてあげ、音楽好きな人間に育てていくことが、一番大切ではないでしょうか。

10年前  
と比較!

## デュオ併願が急増。学習効果は実証済み。

表3：デュオ部門と併願している参加者数

	1993年度	2003年度
A2	1名	28名
A1	36名	219名
B	72名	481名
C	82名	282名
D	36名	133名
E	10名	43名
F	5名	30名

### なぜ、デュオ部門を併願?

- ・ピアノで呼吸が大事と言うのですが、他の楽器とのアンサンブルでは、その呼吸の大切さがしみじみ分かるようです。それと人の聴くという事。バランス、音楽作りなど相互交換出来るのもとてもいいと思います。(宮村トヨ子)
- ・私は小さい時からデュオをさせたり、ソルフェージュ等のグループで組んでいます。とにかく子供を1人にさせないこと。親も1人で孤立させずにコミュニケーションをとれる環境に置くことで生徒も増えて、意識も高めているのだと思います。(江夏祐子)
- ・他の音と合わせる機会が少なくないので、ソロにもどした時、内声までも聴いて弾けるようになったり、打った後の響きをきき通せるようになったりする効果があります。12月、3月は必ず取り入れています。(永山恵子)
- ・デュオは大いにしています。相手の音を聞くことによって、自分の音もよく聞くようになった。又、息をあわせるため、呼吸のための良い練習にもなる。(杉谷昭子)
- ・デュオやコンツェルトは大いに活用しています。ソロでコンペ参加する程の力は無い生徒はデュオ初Aなど、初歩の級で参加させます。予選にパスする喜びを1度味わうと又来年もと意欲的になる事が多いです。(勢志佳子)



2003 年度入賞者が語る、私が乗り越えた壁【C⇒D級】

# 「このくらいでいい」通用せず、 初めて自覚が芽生えた

加藤智子先生 (2003 年度トヨタ指導者特別賞受賞) × 小倉紘子さん (中2/2003 年度 D 級銀賞)

## 初めての挫折を経験

—今年度 D 級にて銀賞受賞されましたが、昨年  
も同級を受けられてますよね。

加藤先生：実は昨年同じ D 級を受けて、予選落  
ちしました。小学校 2 年生から毎年全国決勝  
大会には進出させて頂いておりましたが、初め  
て結果が出ないという経験をしました。その時  
は明らかに準備不足だと分かっていたので、あ  
えて頑張って通そうとは思いませんでした。本  
人は「結果を出したい」と思っていたようで  
すが、それほど真剣でない様子が見て取れまし  
たし、内容が伴わないのに結果だけ得ても、あ  
まり意味がないと思ったのです。

お母様：予選は別に失敗したわけではなく、そ  
れなりに弾き込みはしてました。いつもの練習  
と同じように演奏したつもりなのに、結果が出  
なかったのです。普通に弾いて結果が出なかつ  
たので、それはショックが大きかったですね。



理科と戦国時代の歴史小説が好きという小倉さん。将来は加藤先生  
のように演奏と指導をしたいそうだ。

実は 5 年生くらいからそれまでの練習量を維持  
しなくても、ある程度の結果がついてくるよう  
になりました。そこで、本人は気が緩んだのか  
もしれません。それまではいくら「練習しなさい」  
と言っても、本人はあまり本気にならず適当に  
受け流していたようでしたが、それが崩れたわ  
けですね。本人もようやく、普段の練習が足り  
なかったことに気づき、根本的に何かを変えな  
ければと思ったようです。それから、エチュー  
ド等に力をいれて練習するようになりました。

## 10 の曲を弾いて、1 曲を知る

—2 年目はどのように取り組まれたのでしょうか。

加藤先生：これは 1 年目からですが、エチュード、  
バッハの平均律をしっかりと勉強させました。こ  
れは予選の 2 週間前までやってましたね。また  
音階とアルペジオは日常的にやらせています。  
また、課題曲発表後は、その級の課題曲全て  
を勉強させます。バロック、古典、ロマン派す  
べて 3 曲ずつですね。試し弾きではなく、コン  
ペ申し込みの直前まできっちり弾かせます。な  
ぜかといいますと、縦（時系列的）にジャンル  
を見ることも大事ですが、横（同時代）を見る  
ことも大切なのです。つまり各時代の共通点  
を知るとともに、作曲家による違いが明確にな  
ります。モーツァルトとハイドン、ベートーヴェン  
がどう違うのか等、縦横を知ることによって初  
めて見えてくることもありますね。それをこなして、初  
めて受ける意味があると言っています。1 つの



曲から1つを得るのではなく、10の曲から1つを得る、という考え方です。そうすると、客観的に曲を捉えることができますし、譜読みも早くなります。1年目はさすがに手が回りませんでした。2年目は落ち着いて取り組めたようです。今は大変でしょうけれど、体験として後に残ってくれば良いと思います。

C級くらいまでは、何回も反復練習をすればある程度こなせるようになります。しかし、D級以降は、本人が曲の構成を理解していないとこなせません。ですから、E級で曲が長くなっても、課題曲全曲やらせるようにしています。

お母様：1年目は中1だったこともあって、中学校の中間・期末テストで時間を取られてしまったのも事実です。妹もピアノを習っていてコンペに出っていたので、練習時間をうまく配分するのも難しかったですね。2年目は、本人の意識が変わりました。私は「試験中でも少しはピアノを触ったら?」と言ったのですが、自分から「テストまでは勉強を頑張る。テストが全部終わったら、ピアノに集中する」と宣言し、その通り頑張りました。

—この2年間の経験で、一番変わった事は?

加藤先生：C級までは仕上がった曲にあまり個性が感じられませんでした。個性を出すには、人間自体が変わる必要があります。小倉さんの場合、この経験によって主体性が生まれたと思います。ピアノとの長い付き合いの中で、誰でも1回は必要な経験なのかもしれませんね。

## 自覚は早すぎても遅すぎても難しい

—先生の教室で、最も早熟な生徒さんは?

加藤先生：早い子は小3くらいで、ある種の自意識が芽生えます。しかし、早すぎても難しいですね。小さい頃から出来上がっていて、いつもパーフェクトだと、常に良い結果をだすことに固執してしまいがちです。しかし、小3で完全に自分をコントロールすることは無理でしょう。しかし、一度できてしまったこのサイクルを変えるのは至難の技です。そうしますと、

音楽が小さくなってきてしまうのです。ステージに出て人前で弾くのが、次第に恐怖になってくるのです。ですから、結果を出すのは大きくなってからでいいのではないのでしょうか。常に華やかな結果を出しつづけることは、逆に恐いことです。



—先生の教室では、A2級からG・特級まで、幅広い年齢層の生徒さんがいらっやいます。それぞれ「大きくなったらこうなるだろう」という将来像は想像できますか?

加藤先生：ある程度、将来の成長の仕方は予測が付きませんが、もちろん予想とは違う人もいます。レパートリーやテクニック等、将来を予測しながら指導しているところもありますね。できれば欠点ではなく、長所を指摘してあげてことを心がけています。小倉さんの場合は、小さい頃についたつばる癖がまだ完全には取れず、今もそれを直すことが最大の課題です。あとは、豊かな音を身に付けてほしい。今はまだ一色で、全てが緊張感のある音になっていますが、その緊張の隣には緩んだ音もある、そういったことが分かるようになってほしいなと思います。

お母様：この教室には、小さい生徒から大きい生徒までいますし、これまで色々な生徒さんの様子を見てきたこともあって、結果が出なかったことも成長の一過程として理解できました。1年目コンペ後は1ヶ月くらい落ち込んでましたので、ショックはショックでした。でも先生の言うことに従っていけば、成長していけるという安心と信頼がありました。

加藤先生：一番大切なのは保護者の方の理解ですね。子供はわかってくれるけど、親が客観性がなくなるといけません。抗期はしかるべき時期にあるべきで、それがないと大きくなってから非行に走ることがあります。どんな結果であろうと、がしっかりと子供さんを受け止めることが大切ですね。



2003 年度入賞者が語る、私が乗り越えた壁【C級⇒D級⇒E級】

# 等身大の曲を着実に！ 時代・形式を試行錯誤で学ぶ

沼田薫先生 (2003 年度トヨタ指導賞受賞) × 神津かおりさん (高3/2003 年度 G 級金賞)

## 実は壁だらけの中高生時代

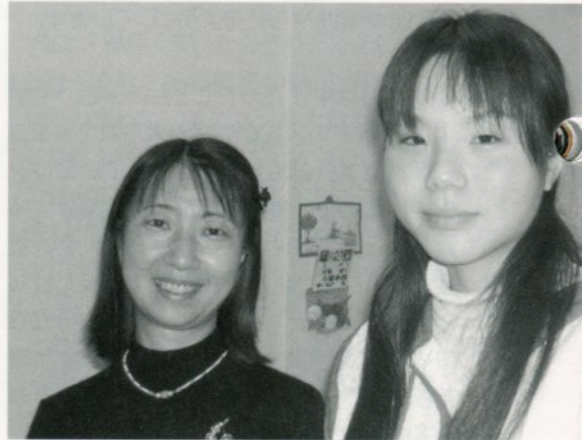
—今年見事に G 級で金賞受賞されましたが、C 級～E 級の頃に悩んだことはありましたか。

沼田先生：神津さんは本当に壁だらけだったんです。小さい頃から感性はありましたが、特に大曲が弾けたとか、どの級も悠々と受けられる実力があつた、ということはありません。C 級までは決勝進出してましたが、中 2 で D 級に挑戦した時は、予選は通過しましたが本選では良い結果が出ませんでした。

D 級くらいになると、課題曲が難しいとか、練習時間が取れないといった問題に突き当たります。神津さんの場合も、音大附属中学に入学して、初めての電車・バス通学で、通学だけで疲れてしまっていました。生活環境の変化は大きいです。他の生徒も皆同じで、「ピアノを取るか、勉強を取るか、他の活動を取るか」で、悩む年頃なのですね。

彼女の場合は、それに加えて手も体も小さかったのです。6 年生くらいで体が大きくなる子いますが、彼女の場合は発育がそれほど早くはなかった。ですから、C 級でオクターブの曲が出てくると大変でしたね。毎年、課題曲の中では易しいものを選んでいました。D 級の時ショパンのエチュードを弾いている人を見ては、「凄いね」と言っていたくらいで。その頃は遠く及びませんでした。

高校 1 年の時に E 級を受けましたが、「もうそろそろ勉強しないといけないなということでショパンのエチュードに取り組みました (No.10-25「革命」)。決勝まで行きたいという欲があれば多分もっと弾きやすい曲を選んだ



沼田薫先生 (左) に幼少の頃から教わっている神津かおりさん (右)

と思いますが、やはりこの時期に勉強すべきと判断して選曲しました。こんな感じで、常に「今できる曲」「今勉強しなくてはいけない曲」を選んでいました。

## 「やる気はあるのに、どう弾けばいいかわからない・・・」

そうして積み重ねていくと、様式や形式という難題に行き当たるのですね。神津さんも焦った時期がありました。モーツァルトのソナタやショパンの弾き方がどうしても分からない、と相当悩んでいましたね。でも私は逐一教えなかったので、「なんで先生教えてくれないの?」とよく聞かれたものです。自分で時間をかけて一つ一つ得ていくしかないんですね。頭だけで理解して解決できるものではありませんから。

神津さん：やる気はあるのに、どう弾けばいいかわからない、そして結果が出ない。E 級の時は 2 地区で予選通過したのですが、1 回目の本選で落ちてしまい、2 回日本選の日までピア



ノを見ると涙が出てきました。その時先生は、「2回受けて何の意味があるの?良い結果が出る可能性があるなら2回受けてもいいけど、準備が間に合わないのであれば、1回だけにしておきなさい」と言われました。それまでの「何とかなる」が通用しなかったんです。結局この夏はその時点で終わりました

沼田先生：彼女自身が、自分の目標に遠い現実を見てしまったのですが、その時の実力では限られた時間内で消化できなかったんですね。この頃はわたしも本当に心配しました。このまま単に弾くだけの人になるのか、それとも人に訴えかけるようなピアノが弾けるようになるのか。

神津さん：コンペが終わってから、ショパンやモーツァルトの別の曲を弾いたり、本やCDを聞いたりして、少しずつそれぞれの作曲家の色や音がわかるようになってきました。それが分かってから、弾くのが楽しくなってきました。

沼田先生：具体的な変化としては、細かい部分練習をするようになりましたね。これまでは弾けて終わりだったのが、例えば「モーツァルトのスラー、アーティキュレーション、レガートとは?」「ショパンらしい音の響きを出すには」というように、様式感に意識をおいた練習をするようになりました。もともと耳は良かったのですが、自分の音を聴く習慣ができたのと、自分のイメージを指や手の動きでどう具体化すればいいか、を追求するようになりましたね。

これを乗り越えてから、神津さんの吸収する力がぐんと高まったのが分かりました。レッスンしていても、これまでと目の輝き方が違うんです。これまでは「本当に聞いているのかな?」と思うこともありましたが、どんな話も、余談すら聞き逃すまいとしているんですね。

## 「等身大でまっすぐ」を信条に

—G級のステージはどうでしたか?

沼田先生：音大受験することに決めたので、高校2年はコンペに参加せず学校選びに奔走しました。翌年(2003年)受験する気持ちが固まったので、長時間演奏することを経験しておいた方がいいということで、F級ではなくG級

に挑戦しました。

30分のステージは初めてでしたが、勉強の過程で納得がいく練習ができたのではないかと思います。体調は万全ではありませんでしたが、落ち着いて弾いていました。これまでと同じく、今回のG級でも特に難しい曲は弾いていません。今まで勉強してきたものを弾いただけですが、そのほうが現在の自分自身がちゃんと表現できると思うのです。難曲だけ人の心に訴えるものがない、あるいはメカニックに偏りすぎてしまう、先生の表現になってしまうケース等がありますが、それよりは「等身大でまっすぐ」であることが大切だと考えています。

実は金賞を受賞した後、お母様が「地味なレッスンの中で、一つ一つのことを身につけてくれた」と仰って下さいました。実は神津さんが伸び悩んでいる時、「他の先生だったらもっと早く良い結果を得させることができたのでは・・・」と私も悩んでいました。しかしようやく壁を乗り越えた後、お母様は「この教室で、色々な花の咲き方を見てきました。ゆっくり咲く人も、ぱっと咲いて間を置いてまた開く子もいます。今やっていることの効果が出るのは早くて3年先だと先生から常々言われているので、それを信じてました」と答えて下さいました。「早くて3年、遅くて5年」という言葉を信頼してくれたのが、大きかったですね。

—壁を乗り越えるには、保護者の方が長い目で見守ることも大切ですね。

沼田先生：今振り返ると、「ああ、あの時が壁だったんだ」と実感します。しかし、気が付いたら超えてました。だからあまり「壁」と思わない方がいいかもしれません。もし課題曲が合わなかったら、合うようになるまで待つ、体が小さければ成長するまで待つこと。逆に成長の早い子には、Jr.G級や飛び級もありますので、選択の余地は沢山用意されていますね。

ピアノとの長い付き合いの中で、このような壁は数年ごとにあるでしょう。伸び悩んでいる時は、色々な先生に聞いてもらったり、コンチェルトやデュオをしたり、良い友人・先輩と触れ合うこと、これからもそれらを意識していきたいですね。



## 3つのキーワードで解くC・D・E級

# C級

### 身体を作る！

#### ①基礎の完成

- ・基本的なハーモニー、リズムの理解（日比谷友妃子）
- ・技術的にはスケールやアルペジオなど基本的なテクニックの安定、そして和声の音のバランスへの挑戦（石崎久子）
- ・指を回すだけの練習でなくフレーズや対位法の左右の均等したメカニックなど。（池田奈甫子）
- ・ツェルニー 30 番の様々な音型を弾きこなすテクニック（指の独立、手首、腕の柔軟性）など。2声インヴェンションで習得するカンタービレ奏法。（前後皓子）
- ・四期の様式の違い、それに伴うタッチの使い分

C・D級は、心身ともに過渡期にさしかかる時期。成長のペースに合わせてながら、ポイントを絞った指導で、その級に求められる要素を確実にクリアしていくこと。これは結果より大切なことと言っても過言ではありません。ここでは中級から上級への入口となる、E級も取り上げます。

け、特にアーティキュレーション。正確な読譜力。和声感、調性感。（沼田薫）

#### ②和声のバランス

- ・B級までのパロックとは違い、テーマと対旋律の音色の違いや曲の形式の違いへの理解（大津山姿子）

#### ③感受性アップ

- ・その子なりの表現心を生かして大人っぽくとなられず、曲としての個性のある仕上げをするのがよいと思われます。（小笠原厚子）
- ・曲（音楽）への感受性と高めること（小野里栄子）

### 【課題曲選定委員長が語る】C・D・E級は何が大事？

## 他力から自力へ意識改革！音に反映されるまで3年。

現在高校1年生の生徒がいます。コツコツ努力するタイプで、ソロはA2級からほぼ毎年受け続け、デュオ・コンチェルト・アンサンブル等も経験してきました。基礎的な技術や様々な形態に対応できる柔軟性はあると思います。

しかしある時「生徒は分かっているだろう」という先生側の認識と、生徒自身が実際に「分かっていること」の間に、ギャップがあることに気づかされました。私がこの事実に気づいたのは、本人が中学生になってからです。曲の難易度、つまり曲の中で表現されている音楽の成熟度と、本人の精神性が一致していなかったのです。技術的には十分弾きこなしているのですが、曲の理解や認識にズレがあったり、先生に指導されたこと以外ではできないという状態でした。D・E級くらいで構成力や表現力が必要な大きな曲が出てくると、このギャップが露わになります。

自ら音を欲求すること、自分の求める音楽を具現化していくこと、中学生の頃は、まだこの意識が薄かったのだと思います。最近になって少し自覚が出てきました。

C～E級で最も大切なのは、音楽への関わりを「他

力から自力に変えていくこと」。こうした意識改革は、その人にあった適切なタイミングがあるのです。指導者としては、その「自覚を促す時機」を的確に察知し、忍耐強く対応したいものです。意識改革しても、それが具体的に音に反映されるまで2～3年はかかります。

私の教室ではコンクール後、生徒にお休みをあげるようにしています。張り詰めていたものを解放する目的もありますが、その際「どうしても弾きたくなったら電話下さいね」と言っておきます。そうするとレッスンに戻ってくるまでの期間によって、その子にどのくらい「真剣にピアノが弾きたい気持ち」があるかが分かります。早い子は次の日、長い子だと3ヶ月ですね。これまでの経験から、その後もレッスンを継続している子は、最大2ヵ月半のブランクでした。

特に中学生以上の生徒には、こうしてピアノと本人の関係を自覚してもらっています。（江崎光世先生談）



## D級

## 頭を使う!

## ①時代様式の習得

・各期の弾き分け、音色の種類等も十分理解し、勉強していかなくてはならない。

構成力、集中力等精神面の成長も必要。資質だけでは通用しない。(穂積有紀)

## ②構成力

- ・D級でも2声から3声と、その違いの自覚、そして曲を立体的に聞かせる為の工夫が必要。(大津山姿子)
- ・ロマン期はショパンのエチュードも入り技術的音楽的に素晴らしい名曲を学ぶチャンスの中、左右のバランスが大きな課題だと思う。(池田奈甫子)
- ・音楽的にはアナリーゼを基礎とする楽曲理解からの表現、作曲家ごとに異なる音色のイメージ

づくり。(石崎久子)

- ・音楽としての和声のつながり、調性の変化、その為に必要な指の動きや和音の響かせ方。(沼田薫)

## ③多彩な音の欲求

- ・バッハの3声シンフォニアになり、各声部を意識することで更に指の独立、各声部を聴くこと。
- ・色々な音、音色を作り出すための技術が必要になる。ピアノ以外の音楽も聴いて色々な楽器の違う音を聴き、美しい音、と音楽を創り出せるようになっていくこと。(布施啓枝)
- ・指の関節もしっかりしてくるので、オーケストラのように色々な音色も要求できる。(堤好美)
- ・様式感や作曲者等、自ら考え、組み立てていく勉強姿勢を養うと共に、ポリフォニーの音楽を聴く耳が完成していること。(江夏祐子)

## E級

## 心を表現する!

## ①音楽の総合知識

・音楽的には作曲家やその時代背景や楽器の発達等、総合的に深い知識を踏まえた上での明確な表現(石崎久子)

- ・2声インヴェンションと3声シンフォニアを合わせたような平均律が課題曲に入り、プレリュードとフーガの音楽的な特徴が出てくる。例えばプレリュードの軽い感じやフーガの建設的で重々しい感じ等の表現が要求されてくる。(池田奈甫子)

## ②表現力を高めるテクニック

- ・一音一音の持つ意味を考えそれを表現できる技術を磨くことが必要。音楽的には作曲者の特徴と構成を考え表現できるようになる事。(布施啓枝)
- ・音楽表現を様々な感情にまかせて演奏しないこと、曲を通して何を伝えたいのか、意図を感じ

させることが重要。(大津山姿子)

- ・音色の変化をつける為のタッチの変化。手首の使い方や腕の重みの掛け方等。(池田寿美子)
- ・ツェルニー50番、60番、モシュコフスキー練習曲全曲、ショパンエチュード数曲マスターしておく。(秋葉暁子)

## ③個性の追求

- ・1人前の演奏者としてこの世界ではもう大人といてもいい。D級で求められている事+多くの人に感銘を与える演奏、つまり自分の音楽の確立をしなくてはならない。アピール性が求められる。(穂積有紀)
- ・音楽経験を具体的に演奏の中で生かしていき、想像力と行動力を持つこと。(横山朋子)
- ・自分自身の音楽を作り出し、楽譜の奥に流れる音楽性を表現していくことが必要。教えてもらうだけでなく、自分から興味を持ち調べたり試したりすることが大きく影響する。(岡田裕子)



## 壁を壁と思わない人にはワケがある①

### Q：無理なく上達させるには？

今日の前にある壁の高さは、どのくらいでしょうか？「なかなか思うように上達しない」「この曲がどうしても弾けない」—これらは、多くの人が感じる「壁」です。「壁」は目標の大きさと同現在の実力の差に比例します。伸び悩んでいる時こそ、足元をみつめて壁の高さを見直し、実力に見合った目標設定をしたいものです。その為には何を意識すべきでしょうか。

### A：コンペを学習指標のひとつに。

#### 「この級ならばこの程度に達しているべき」という物差し

私の教室では、「コンペのために」と特に意識しているわけではありません。コンペは指標の一つとして考えています。この級を受けるのだったら、この程度できていないといけない、という物差しが私の中にあるので、コンペに出たいと意思表示している生徒に対しては、そこまで引き上げてあげようと努めます。

C・D級になると、まず技術的にきちんと弾けていないといけませんので、テクニックの習得は欠かせません。ある程度技術のある生徒には、ショパンのエチュードを与えています。もちろん他のエチュード教材も使っていますが、ショパンの方がより幅広い多様な要素を含んでいるように思います。たとえ身体的・技術的に及ばず完全に弾けなくても、教材の一つとして取り入れてます。またバッハ、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンも必ず日常のレッスンで満遍なく弾かせています。

#### 将来の設計図に沿って、テキストを選定

中学生くらいになると、その子の将来の設来図がある程度でき上がってきます。コンペに参加するか否かに関わらず、将来に向けて今この子に何が必要か、と考えながらテキストを選んでいきますね。導入の段階からかなりの量のテキストを一度に勉強させ

ているので大変だと思いますが、気がついた時には基礎がしっかり出来ているので、その後自然に積み上げることができますね。

私は楽譜を収集したり、研究するのが好きで、「これはどこかに使えそう」「あの子にはどんな楽譜がイイかな」といつも考えながら教材を見えています。特に低学年は技術的・気分的にムラがあるので、ペダルを多く使う曲やアンサンブルできる曲など、色々なタイプの曲を選んで興味を持たせ、その中から教師としてその子の特性をつかんでいきます。高学年の生徒には四つの時代・スタイルをきちんと学んでもらうようにしています。高学年の場合、大抵は既存の楽譜を使いますが、近現代は邦人作品を含む、できるだけ多くの作曲者に触れさせていくようにします。

全生徒に共通して言えるのは、できるだけハーモニーの綺麗な曲を選ぶこと。特に小さい子はイメージネーションを刺激し、先生との対話を通して色々想像を膨らませられるような曲を選ぶことが大切です。そして「このくらいならコンペ受けられそうね」という場合には、参加をお勧めします。



今野 早苗 先生

課題曲選定委員 (Aグループ)  
審査員選考委員 課題曲選定委員 (Cグループ)



## 壁を壁と思わない人にはワケがある②

### Q：結果が出ない＝壁が克服できてない!?

2年連続して受ける参加者が増えている昨今。1年目より技術的・身体的余裕が出て、より良い成績を上げる生徒もいれば、2年目は緊張感が薄れて練習に実が入らず、1年目より結果が落ち込むことも。また新たな音楽的目標に向けて努力を続けている人の中には、まだ道半ばで結果が出ないこともある。果たしてどの時点で「壁を乗り越えた」と言えるのだろうか。

### A：コンペは通過点。現状を客観的に知る糸口に。

#### 同級2年目の取り組み方、結果の受け止め方とは

昨年度、中3の生徒でE級に初挑戦し、予選通過したのでピアノに対する意欲も高まり、今年度は前年より良い演奏をしたと思ったにも関わらず、本選に進出することができなかった事例です。

本人は前年度コンペの講評も踏まえて前向きに練習してきており、真面目にコツコツと1年間積み上げてきたつもりでしたので、今回のコンペの結果は本人にとっては予想しなかったことで、大きなショックでした。

もともとセンスもあり、真面目な性格の生徒で、練習も真剣に取り組んできました。しかし時々ピアノを叩いてしまい、やや音が硬くなる傾向がありましたので、指の使い方、脱力の仕方、鍵盤に指が触れたときのピアノのハンマーの動き、良い音の出し方、曲全体を見通す構成力など、とにかくあらゆることを丁寧に組みませました。

特に音楽的表現については、感性を育成するということで、一つ一つの音やフレーズを自分の感覚で丁寧に表現し、「音楽として自分で感じとる」ことを重点に録音もしたり、自分の創る音や表現のしかた等、音楽的感性を磨く努力をしたつもりでした。

にもかかわらず、今回は自分の期待した結果が出ませんでした。本人は「なぜ?」と納得いかない様子で、しばらくは落ち込んでいましたが、いくらか時

間が経過し、気持ちを取り直すようになりました。

#### 成果はコンペの半年後に表れた!

昨年末に教室の発表会を行いました。改めてホール(1000席)の後部座席から彼女の音を聴いて、「本当に綺麗な音が出てくるようになった」と実感しました。これまでレッスン室ではその音色の向上にあまり気づきませんでしたが、着実によくなっていたのですね。

コンペの時には成長途上にいたので結果こそ出ませんでした。このプロセスは決して無駄ではなかったと実感できました。コンペに向けて特に準備していることはありません。ただ日常の積み上げをコツコツするのみです。そしてコンペでいかなる結果が出て、最終的に自分が目指す音楽を実現させることを、目指したいと思います。



秋葉 暁子 先生

地区代表評議員



## 壁を壁と思わない人にはワケがある③

### Q：春までの取り組みで何かが変わる？

ピティナ・ピアノコンペティションの課題曲発表は毎年3月1日です。コンペを受ける人も受けない方も、来年度以降のステップアップの為に、この春何かに取り組んでみませんか？練習方法の見直し、指の強化、バロックの徹底研究、デュオ・コンチェルト・アンサンブルへのチャレンジなど、選択肢は様々です。「何か伸び悩んでいる」生徒にも、風穴をあけるきっかけになるかもしれません。

#### デュオに挑戦、相手の音に触発される

沼田薫先生（正会員・東京都）

生徒の神津かおりさん（前掲）が中3の頃、たまたま3月の発表会で弾いたデュオの曲がその年の課題曲になったので、初めてデュオ部門に挑戦しました。（2000年デュオ上級に初挑戦、2001年同級優秀賞受賞）

この経験で一番大きかったのは、組んだデュオの相手である黒木敦子さんも良い音楽と音を持っており、それに触発されたことです。セカンドを弾いた2年上の黒木さんが、フィンガートレーニングに行き始めて、さらに音が変わり始めたのですが、隣で音がどんどん磨かれていくのを目の当たりにして、神津さんもトレーニングに通い出しました。もともと前の先生につけて頂いた音感の良さがあったのですが、それに加えて音が明らかに変化してきたのが分かりましたね。

逆にセカンドの黒木さんも、神津さんの隣で影響を受けました。「歌うこととは何か」を納得させられたようです。

また彼女が中2の頃、初めてコンチェルトを勧めました。それまであまり練習が好きではなかったのですが、他の楽器とのアンサンブルの楽しさを知って、自発的に練習するようになりましたね。今年5月には教室でコンチェルト発表会を予定しております。今シヨパンの「アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ」を練習していますが、そのオーケストラ版が

実現することになります。

お互いに触発しあって成長したデュオ。2001年度デュオ上級で優秀賞（右端）



#### バロックの気品を体感させる

岡田裕子先生（正会員・兵庫県）

コンペが終わってから翌年度課題曲発表がある3月までは、少しゆとりがありますのでバロックに力を入れています。特にC級以上は普段からバロックに触れていないと難しいですね。まずはバロック時代を視覚で理解してもらえよう、宮殿や教会や絵が載っている百科事典や書物を見せて、雰囲気をつかんでもらいます。また、バロック時代の服装や靴、かつらといった小物も重要な要素です。着物の帯や太いベルトを使ってコルセットを体感したり、長めのスカートを履いてドレスのイメージを理解してもらったり、ヒールのある靴を履かせてステップを踏んでもらいます。バロック時代の制約ある服装では、お腹を曲げられませんし、ステップやお辞儀も自ずと上品になります。後の時代のワルツを踊る感覚とは違いますね。こうした体験を小学生を中心にやってもらいます。中学生になると、少し気恥ずかしさが出てくるので、一緒に絵を見たりCDを聴いたり、言葉で雰囲気を説明したりします。

最近の子はスニーカー・ジーンズが日常スタイルとして定着していることが多く、例えば正月に着物を着たり、桃の節句にお雛様を飾ったりという習慣があまりないようで、あらたまった格好やよそ行きの気分がなかなか分からないようです。そこでこのような気品ある格好を疑似体験することによって、「優雅さ」や「上品さ」といった感覚を身に付けてもらいたいと思います。

今年から発表会（12月）で、自分の自由曲1曲に加えてバッハのインベンション1曲を弾いてもらうようにしました。大体同じ番号の曲を選ぶ子が多かったのですが、実際同じステージで弾





きあってそれぞれ刺激を受けたようです。「自分が弾けると思ってたけど、あの子の演奏のここがいい」という様に。私が言うより、よほど効果があったようです。自分の演奏を客観的に振り返ることによって、その後のレッスンでも弾き方が変化しました。

## 壁を感じさせないレッスンと効率良い練習を实践

福井亜貴子先生 (正会員・奈良県)

現在中2の男子生徒(2000年C級本選優秀賞)がおりますが、進学校に通いサッカー部に所属するかわら、ピアノにも取り組んでいます。勉強・部活に忙しいので、レッスンは隔週に、エチュードとパッサを毎週交互にと、あまり負荷がかからないようレッスン分量を配分しています。自宅での練習時間は自分で考えて捻出しているようですが、「ピアノが好き」という気持ちがあるので、忙しいながらもリズムは出来上がっているようです。

中学生になると、勉強や部活で忙しくなり、練習時間が思うように取れなくなってきます。これはその年

齢に限ったことではありませんが、練習には集中力と効率性が不可欠です。まずは楽譜に書いてあること、テンポ・強弱・拍子・調性などをしっかり読み込むように指導しています。練習の時も、ただ両手でタカタカ弾くのではなく、例えば右手のメロディーを弾く時に、1回目は音色に気をつけて、2回目はリズムに気をつけて・・・というように、細かい項目に分けて練習をさせるようにしています。それによって、曲の完成度が以前より高くなったように思います。自分の欲しい音を追求するのが練習の目的の一つですから、音色には特に気をつけるように生徒に言っています。

また朝学校に行く前5分だけでもいいから、1回集中して曲を弾くことを奨励しております。脳も活性化し、集中力がつきますね。



福井先生のレッスン室にて。

## 室内楽にチャレンジ!

# 「聴く人」あつての「自分」に気づく

津島 圭佑さん (2003年度秋吉台室内楽研修会に参加 / 2003年度G級ベスト5賞・第1回福田靖子賞選考会ベストレッスン賞)



今回この研修会に参加して、私はあらためて自分と向き合うことができました。はじめ私はどうしたら他の楽器と呼吸が合い、一体感を感じ

られるのか、そればかり考えていました。そうしていくうちに、音量、音色についての問題を発見し、それを改善しようと努力しました。しかし、自分の楽器、つまりピアノで表現する自分の音楽を殺さないといけないのかと思い始め、しまいには存在の意味すらわからなくなってしまったのです。

そんな時講師の先生が声をかけて下さいました。先生は昔同じことを悩んでいたとおっしゃ

っていました。私はそのことが嬉しく、積極的に相談することができました。そして相談するうちに分かったことがありました。それまでソロに大して孤独なイメージがありました。一人でその音楽に向き合い、一人で音楽をつくり上げ、一人で演奏します。もちろんその背景には様々な人たちの存在がありますが、だからアンサンブルとソロは全く違うものと思っていたのです。しかし、ソロは決して孤独ではありませんでした。ソロにおいても「聴く人」があつての「自分」なのです。自分の世界にのめりこむだけではなく、常に「聴く人」を意識することが大切なのです。それは普段家で練習するときから、ステージで弾く時に及ぶまでどんな時であつてもです。単純なことですが、とても大事なことを忘れかけていたような気がします。

よく自分の音楽を相手に伝えようとは考えますが、「誰かのために弾きたい」とか「相手をこんな気持ちにさせたい」とか、そんな情熱を燃やしたいという、新しい気持ちにも気づいたのです。



# エピローグ

小学校高学年から中学校にかけては、進学、生活環境の変化、心身の急速な発達など、様々な変化に直面します。こうした変化に伴って、「自分にとってピアノがどのような存在であるか」を見直す段階に入ります。専門の道に進む、勉強や部活と両立する、趣味で続ける、他の分野に進む等、自分の進むべき道を模索する初めの一步というわけです。このプロセスを端的に示している言葉をご紹介します。「C級はそれまでの学習の反省期、D級は『ピアノが好きか?』という自問自答の時期、そしてE級は『自らの意思で音楽に関わっていきたい』という強い意志が必要となる時期である（奥村真先生）」

この成長の過程では様々な問題が一気に噴き出すこともあり、伸び悩んだり、行く手に壁を感じることも少なくないでしょう。たしかに表面的な成長のスピードはそれまでと異なるかもしれませんが、決して焦ることなく、「現在自分はどのような状況にあるか」を見定め、「今できること」を少しずつクリアすることによって、小さな成長を積み重ねることができます。そして気が付いたら壁を越えていた、そうありがたいものですね。

## アンケートにご協力頂いた先生方

このアンケートは、1990年以降延べ50名以上の生徒をピティナ・ピアノコンペティションに輩出した、指導者の先生方を対象に実施いたしました。ご協力誠にありがとうございました。

秋葉 暁子 (愛媛県松山市)	小野里 栄子 (栃木県宇都宮市)	永山 恵子 (愛知県幡豆郡)
秋葉 芳美 (愛媛県松山市)	小原 祥代 (東京都港区)	西尾 学 (愛知県刈谷市)
浅川 みつ子 (茨城県北相馬郡)	掛川 優子 (長野県松本市)	沼田 薫 (東京都八王子市)
安藤 久仁子 (千葉県木更津市)	門脇 智美 (鳥取県倉吉市)	根元 知世 (東京都国分寺市)
伊井 光子 (愛知県愛知郡)	金辺 明子 (岡山県岡山市)	蓮実 マス子 (栃木県那須郡)
池田 恭子 (茨城県水戸市)	菊地 昭子 (栃木県大田原市)	長谷川 美智子 (福岡県宗像市)
池田 寿美子 (兵庫県西宮市)	草野 尚子 (広島県福山市)	日比谷 友妃子 (神奈川県鎌倉市)
池田 奈甫子 (茨城県土浦市)	久保山 千可子 (福岡県福岡市)	日吉 明美 (茨城県筑波郡)
石井 なをみ (兵庫県西宮市)	江夏 祐子 (神奈川県大和市)	平間 百合子 (宮城県仙台市)
石黒 加須美 (愛知県一宮市)	古賀 未加緒 (福岡県北九州市)	深谷 直仁 (愛知県高浜市)
石崎 久子 (富山県高岡市)	近藤 智重 (福島県いわき市)	福井 亜貴子 (奈良県奈良市)
井上 朗子 (大阪府岸和田市)	今野 早苗 (神奈川県横浜市)	福崎 郁代 (鹿児島県名瀬市)
上野 敬子 (奈良県奈良市)	斉藤 桂子 (新潟県新潟市)	福留 真循 (滋賀県近江八幡市)
梅本 光子 (静岡県伊東市)	佐藤 昌代 (栃木県栃木市)	藤井 百合子 (東京都渋谷区)
漆原 好美 (宮崎県宮崎市)	佐野 幸枝 (神奈川県横浜市)	藤原 真紀子 (京都府舞鶴市)
越中谷 久枝 (宮崎県串間市)	榛葉 和子 (長野県諏訪市)	藤施 啓枝 (島根県浜田市)
江幡 和子 (茨城県水戸市)	杉谷 昭子 (東京都葛飾区)	穂積 有紀 (千葉県我孫子市)
大石 照子 (福島県喜多方)	角野 美智子 (千葉県八千代市)	真継 豊子 (埼玉県上福岡市)
大城 りか (福岡県福岡市)	勢志 佳子 (大阪府豊中市)	松隈 和子 (北海道滝川市)
大塚 京子 (大阪府吹田市)	芹澤 文美 (兵庫県神戸市)	松延 瑞穂 (千葉県習志野市)
大塚 由美子 (徳島県鳴門市)	前後 皓子 (福島県耶麻郡)	丸川 映 (岡山県岡山市)
大津山 姿子 (熊本県熊本市)	高嶋 麻企 (神奈川県横浜市)	水野 裕 (愛知県名古屋市中区)
大西 美保子 (千葉県四街道市)	高畑 真弓 (富山県水見市)	水本 真澄 (奈良県奈良市)
大橋 幸恵 (千葉県佐倉市)	竹内 美保子 (千葉県印西市)	宮澤 功行 (北海道札幌市)
大林 裕子 (愛知県名古屋市中区)	武田 宏子 (香川県高松市)	宮下 和子 (石川県小松市)
大山 まゆみ (香川県高松市)	竹本 喜代美 (愛媛県松山市)	宮村 京子 (宮崎県宮崎市)
小笠原 厚子 (愛知県安城市)	太月 浩美 (鹿児島県名瀬市)	宮村 トヨ子 (兵庫県宝塚市)
小笠原 厚子 (愛知県安城市)	田中 克己 (埼玉県上尾市)	森 美紀 (岡山県岡山市)
岡田 恵子 (岡山県倉敷市)	田中 京子 (福岡県久留米市)	山内 るり (高知県高知市)
岡田 裕子 (兵庫県神戸市)	田中 みゆき (青森県弘前市)	山田 紀子 (栃木県足利市)
奥村 真 (愛知県名古屋市中区)	棚田 都美子 (大阪府和泉市)	山根 祐子 (山口県萩市)
	堤 好美 (滋賀県草津市)	山本 節子 (大阪府豊中市)
	照沼 裕佳子 (茨城県常陸太田市)	横山 朋子 (栃木県宇都宮市)
	登坂 睦子 (茨城県水海道市)	横山 佳枝 (大阪府高槻市)
	鞆 みゆき (山口県古敷郡)	和田 仁 (茨城県つくば市)
	中田 元子 (大阪府大阪市)	和田 由美子 (東京都大田区)
	中峰 明美 (茨城県北相馬郡)	※以上五十音順・敬称略
	中村 真代子 (静岡県湖西市)	

取材・構成◎菅野恵理子